

蟹瀬令子委員長

「モナコ観光大国のモデルケース」



当協会情報委員のメンバーがさまざまな視点から論じる「情報委員の眼」。連載第1回目となる今回は、蟹瀬令子委員長がモナコ旅行で感じた「日本の小都市における再生モデルのヒント」を紹介する。

今年の5月のゴールデンウィークにモナコにかけた。一週間後に、あの有名なF1レースが開催されるにあつて、観光大国モナコはその準備に大わらわであった。街中の道路の脇にはF1のためのガードフェンスが組み立てられ、大公などのための貴賓席が設けられていた。以前訪ねた時はヨーロッパのデイズニールンドのような国のありように少々驚かされたが、今回は商業の街を象徴するような、国をあげてのイベント

準備に再度驚かされた。

かつてはヨーロッパの小さな漁港の国であったモナコがなぜここまで発展をとげたのか。それはグレース・ケリーの登場によるものらしい。彼女は交通事故死という悲惨な最期を遂げたものの、その名は小さな一国を全世界に知らしめるに十分な力を発揮した。これについて面白い話を現地で聞いた。レニエ3世がギリシヤの海運王オナシスに「もつと国を有名にしたい」と相談すると、「アメリカの有名な女優を王妃にもらいなさい」というアドヴァイスが戻ってきたというのだ。マリリン・モンローも候補に挙がったが、結果的にはグレース・ケリーに決まった。国としてのブランド価値をグレース・ケリーが高めたのは確かだ。しかし、これは成功要因のひとつ

ではない。国が環境保護、治安維持や観光立国として景観を重視した都市デザインを施していく。大公アルベール2世の先祖であるアルベール1世は海洋学者として、早くに海洋環境保護に乗り出し、今の環境立国としての礎を作ったと言われている。



地中海に面するモナコは観光で名をあげた

蟹瀬 令子

(株)ケイ・アソシエイツ 代表取締役社長
上智大学英文学科卒業後、(株)博報堂入社、コピーライターとなる。

1987年米国ミシガン大学ビジネス学科に休職留学し、帰国後、博報堂生活総合研究所主任研究員、制作室コピーディレクターを経て、1993年クリエイティブ・マーケティング会社を設立、代表取締役任に。(株)イオンフォレスト (ザ・ボディショップジャパン) 代表取締役社長を6年務めたのちに退任し、現職。近著「やっぱ、『自分ブランド』でしょ」(講談社)。日本小売業協会 アジア小売業者世界大会 広報・宣伝委員会委員、生活者委員会委員なども務める。

る。観光産業に必要なものを一貫して実践していく。たとえば、観光客が出す多大なゴミはどこへ行くのだろうか。観光客が寝静まるのを待って深夜に収集され、焼却場で熱燃料としてリサイクルされるのだ。

小国であったがゆえにできたと言う人もいるが、日本の小都市の再生モデルになるのではないだろうか。

景観保護の都市開発、環境保護、治安維持、観光客をもてなす姿勢、そして、なによりも重要なのは、それを実現できるリーダーの出現である。今回は世界でも有名な観光資源を持つている日本のことを考えさせられる旅でもあった。